

人喰い口裂け女

作者 大黒達也

口裂け女

作者 大黒達也

【あらすじ】

どこにでもある普通の公園で、血に塗れた惨劇が夜ごと繰り返される。

ある日、若いカップルが都市伝説である口裂け女に襲われる。

男は激しい凌辱の後に、男性器を切り取られ、惨殺される。女も同様に凌辱を受けた後で喰い殺される。

それを目撃した定年間近で自殺願望を持つサラリーマンが、数奇な運命の波に呑み込まれる。

【目次】

プロローグ

第一章 獲物

第二章 人食い女

第三章 霊能者

第四章 後悔

第五章 襲撃

第六章 拉致

第七章 死闘

エピソード

【主要な登場人物】

角田達郎

今年で五十九歳になり、定年を控えた会社員。過去に会社から受けた苛めが原因で妻に逃げられ、生きる気力を失い死に場所を求めている。

白石満里奈

十九歳。都内の大学に通う女子大生。学費を稼ぐためにスナックでアルバイトをしている。モデルのような肢体を持ち、瞳が大きな美少女。

【本編】

プロローグ

月がきれいな夜だった。ひとりの中年男が夜の公園にひとりベンチで缶ビールを飲んでいて。時刻は午後十時を過ぎていた。

角田達郎五十九歳。来年には定年を控えていた。二十年前同じ会社の上司からパワハラに合い、降格、昇給停止という扱いを受け、定年間近というのに主任という平社員と大差ない役職にとどめられていた。

後輩達は皆上司になり、職場での立場は非常に弱いものだった。ストレスが重なり時に家族に暴言を吐くこともあった。

家族のために辛い境遇に耐えていたが、数年前、妻に離婚されていた。結婚したひとり娘も尋ねてくることはほとんどなかった。

孤独だった。今もビールを飲みながら死ぬことを考えていた。美しい月も角田にとっては空しいばかりだ。

公園の反対側に人影が見えた。目を凝らしてみた。街灯の明かりが二人の男女を照らし出していた。

「今日は返してくれるんだろうな？五百万」

ホスト風の若い男が、二十歳くらいに見える女を睨み付けていた。

「五百万円なんか借りていないわ。百万くらいでしよう……」

「冗談言うなよ。借金には利子が付くんだよ。大学で何勉強しているんだ？」

男は女の肩を掴んですごんで見せた。

「御免なさい。今はお金が無いの。許して……」

「お前の親は資産家なんだろう。融通してもらえばいいじゃないか」

「あれは嘘よ。普通の会社員なの」

「お前。俺を馬鹿にしているな。俺はこう見えても組の者なんだ。兄貴に頼んでお前を風俗に売り飛ばしてやろうか」

「……」

その時、女の表情が見る間に蒼白となった。男は女が風俗と聞いて動揺したものと考えた。女の視線は男の背後に集中していた。

「私。きれい？」

誰かが背後から男の肩を軽く叩いた。

「何だ。オメエ！他人の話に口突つ込みやがって！」

男は怒声を上げながら振り返った。真紅の衣服に身を包み、大きな白いマスクをした女が立っていた。

女がマスクを外した。

「何！お……お前は……」

愕然と佇む男の前に、口が両耳まで裂けた若い女が立っていた。

「私、きれい？」

「ギャー」

男に脅されていた若い女が、悲鳴を上げ意識を失い、芝生の上に倒れた。

「この化け物が！」

男が懐から、ナイフを抜いた。女は不気味な笑

みを浮かべながら、男に巨大なハサミを見せ付けた。男の持つナイフより、遥かに大きかった。

「お……。俺は組の者なんだぞ。お前。組の恐ろしさをしらないのか……」

男は女を脅しながら、腰が引けていた。背後をちらりと見て逃げ道を確認した。

「御兄さん。チ*ポ見せてよ。シャブってあげるから」

女が前に出て来た。長い舌で自分の顎を舐めまわしながら男の股間に淫らな視線を向けて来た。

「言ってやがれ！」

男は破れかぶれの形相で、女に体当たりをかませ脇腹にナイフを根本まで突き刺した。

「痛いじゃないか」

女はのんびりとした口調で言い、男を片手で突き飛ばした。男は三メートル以上吹き飛ばされ、地面を転がった。

女はナイフを抜き、何事も無かったように白い上着のポケットに仕舞い込んだ。刺されたダメージは感じていないようだ。地面に倒れている男に

近付き腹部を蹴り上げた。

男は蹴りの一撃で意識を失った。

意識を失った男女二人を両肩に載せ、公園の奥に消えた。

「あれはいったい何なんだ……」

角田は一部始終を近くの茂みから見ていた。若い女の口が耳まで裂けているのを見たときは思わず声が出そうになった。男女を連れ去ったときには、警察に通報すべきと思ったが、スマホを会社 に忘れてきたことを思い出した。

本能はしきりにこの場から立ち去るように警告してきたが、両足が意思に反して動き出した。夢遊病者のような足取りで女達が消えた方角に進んだ。

不思議なことに女達の姿が、目の前で霧のように立ち消えた。彼女達がいた場所に霧が立ち込めていた。角田の姿もその霧の中に消えた。

第一章 獲物

口裂け女は、捕獲した男女を古井戸の近くに横たえた。巨大なハサミで二人の衣服を切り刻み始めた。あつという間に二人を全裸に剥いた。

古井戸の水で、男女の裸身を洗い清めた。特に股間を丁寧に洗った。

意識を失った男を抱き上げ、古井戸の近くに生えた大木の太枝に両手を括り付けた。

その後で、男の頬を数回叩いて、失神から覚めさせた。

「ここはどこだ？」

男が、両手を拘束された状態で周囲を見回した。

「目覚めたようだね」

口裂け女が、男の背後にしゃがみ込み、片手を男の前に回し、男根を白い手で扱き始めた。尻の割れ目に顔を押し込み、肛門を舐り始めた。

「お前。何やってんだ？ロープを解きやがれ」

「お前。りっぱなマラを持っているな。これで何人の女を泣かしたんだい？」

「うるせえ。ぶち殺されたいのか！」

「威勢がいい、お兄ちゃんだね。おお、勃起してきたね。感じているんだろう？」

再び尻の割れ目に顔を押し付け、肛門を激しく舐めた。男の裸身が、やがて快楽に震え始めた。

「本当に美味しそうなマラだね」

口裂け女が男の前に周り、今度は、乱杭歯が生えた口を大きく開き、男根を呑み込もうとした。

「止めてくれ……」

口裂け女は淫らかな笑みを浮かべ、口を開け閉めし乱杭歯を打ち鳴らした。

恐怖に戦く男の男根を喉の奥まで呑み込んだ。驚く程長い舌が出て来て、男のアヌスに忍び込んだ。男が女のような悲鳴を上げた。女の舌が直腸内に蠢き、乱杭歯が生える口で男根を吸われているのだ。凄まじいまでの恐怖と快感の感覚に気が狂いそうになっていた。すぐに男の尻が震え、がつくりと肩を落とす。

「お前の精液はけっこう美味しかったよ。でも生

かしておくほどでは無いね」

口裂け女が、巨大なハサミを取り出して、快感の余り半ば意識を失った男の男根を刃で挟み根本から切断しようとした。

その時、近くの茂みで様子を窺っていた角田が、地面に落ちていた枯れ木を踏んでしまった。口裂け女の動きが止まった。次の瞬間、煙のようにかき消えた。

不意に背後から肩を叩かれた。

「ひえ！」

振り返った角田は、悲鳴を上げて地面に尻餅をついた。すぐ目の前に口裂け女が立ち、恨めし気な表情で見下ろしていた。女の表情が微妙に変化した。

「幸次郎……」

一瞬、口裂け女の顔が、色白な美女の顔に変化し、すぐに元の顔に戻った。

「お前。死にたいようだね？凶星だね」

口裂け女が、角田の前にしゃがみ込んで、ズボンのジッパーを開け、男根を掴み出した。角田は

唾然とした表情を浮かべていた。恐怖の余り身動きがでなかつた。

「けっこう大きいね。色艶もいいよ」

口裂け女は、角田の男根を扱き始めた。

「こ、殺してくれるのか？」

「いいよ。オジサン結構いい男だね。渋いよ。このマラも美味しそうだし望みを叶えてあげるよ」

「本当か？」

「今日は駄目だよ。獲物が二人もいるんだ。私ひとりじゃ食べ切れえないからね。また来なよ。オジサンも食べてあげるから」

その言葉を聞いて、意識が遠のいた。気が付いたら、先ほどの公園のベンチにひとり座っていた。あれは夢だったに違いない。角田は自分の頭を片手で軽く叩いて、苦笑を浮かべた。しかし、股間には、まだ艶めかしい口裂け女の白い手の感触が残っていた。

角田はふらふらと立ち上がり、公園内を歩き始めた。小一時間、歩いたが、古井戸も古民家も見当たらなかつた。首を軽く横に振り、公園の近く

にある繁華街に向かった。

第二章 人食い女

「あら。お帰りなさい」

二十代のホステスが、角田を店内に招き入れた。公園に行く前に立ち寄った店だった。

カウンターとボックス席がふたつあるこじんまりとしたスナックで、角田は常連客だった。

「ああ。また来てしまった」

「どうしたの？青白い顔して、幽霊にでも会ったみたい」

角田がカウンター席に着くと先ほどのホステスが、カウンター内から話しかけて来た。

「幽霊なら、殺されることはないが……」

「本当に怖い思いましたよね？」

ホステスの名は満里奈と言った。角田の前にハイボールのグラスを置いた。

「今日は家には帰りたくないな」

「誘っているの？」

「からかうのはよせよ。満里奈ちゃんの歳なら、娘より若いことになる」

「私は結構、年上が好きなの」

満里奈はカウンターに置かれた角田のグラスを指先でなぞる仕草をした。満里奈は身長が百七十近くあり、乳房や腰の張りも十分大きく、美人の部類と言えた。

「今夜は思いつきり飲むよ」

「いつもじゃない！」

丁度、その頃、公園では、口裂け女が、焚火の前に座って何かを焼いていた。木の棒に刺して焼いていたのは、男根だった。男根の先から油が零れ落ち、焚火に落ちて火の粉を上げていた。

口裂け女の膝には、先ほどの若い女が全裸でうつ伏せに抱かかれたいた。意識を失った若い女の盛り上がった白い尻を舐めまわしていた。

「いい具合に焼けたね。旨そうだ」

焼いていた男根に醤油をかけて齧り付いた。若

い女の尻を空いている方の手で触りながら男根の味を堪能した。コリコリとした食感が最高だった。

その近くには、先ほどの男が男根を切り取られ、倒れていた。出血多量で虫の息だった。口裂け女が立ち上がり、男に近より、残っていた辜丸をナイフで切り取り、脂をしいたフライパンで炒め始めた。辜丸を切り取られた男は、白目をむいて絶命した。

辜丸もすべて平らげ、満腹となった口裂け女は、古井戸の近くにある古民家風の平屋に、意識を失った若い女を両手に抱え、入っていった。

六畳ほどの和室には、蝋燭の仄かな明かりが点されていた。

口裂け女は、畳の上に敷かれた布団に全裸の女を横たえた。

「そろそろ起きなよ」

女の頬を数回叩いた。

「何……」

すぐ目の前に座っている口裂け女に気が付いた。再び意識を失いそうになった。余りの恐怖にすくみ上り、声も出さず動くこともできなかつた。

「お前可愛い顔しているね。名前は何ていうんだい？」

若い女の白い乳房を握り締めた。

「……」

「何だって？聞こえないよ」

巨大なハサミで若い女の乳首を切断しようとした。

「結衣です。若菜結衣です」

「結衣ちゃんか、いい名前だね。歳はいくつになるの？」

「二十歳です」

「学生さん？」

結衣は大きく頷いた。目の前に都市伝説で有名な口裂け女がいるのだ。とても生きた心地はしなかつたが、言うことを聞いていれば、殺されることは無いように感じた。

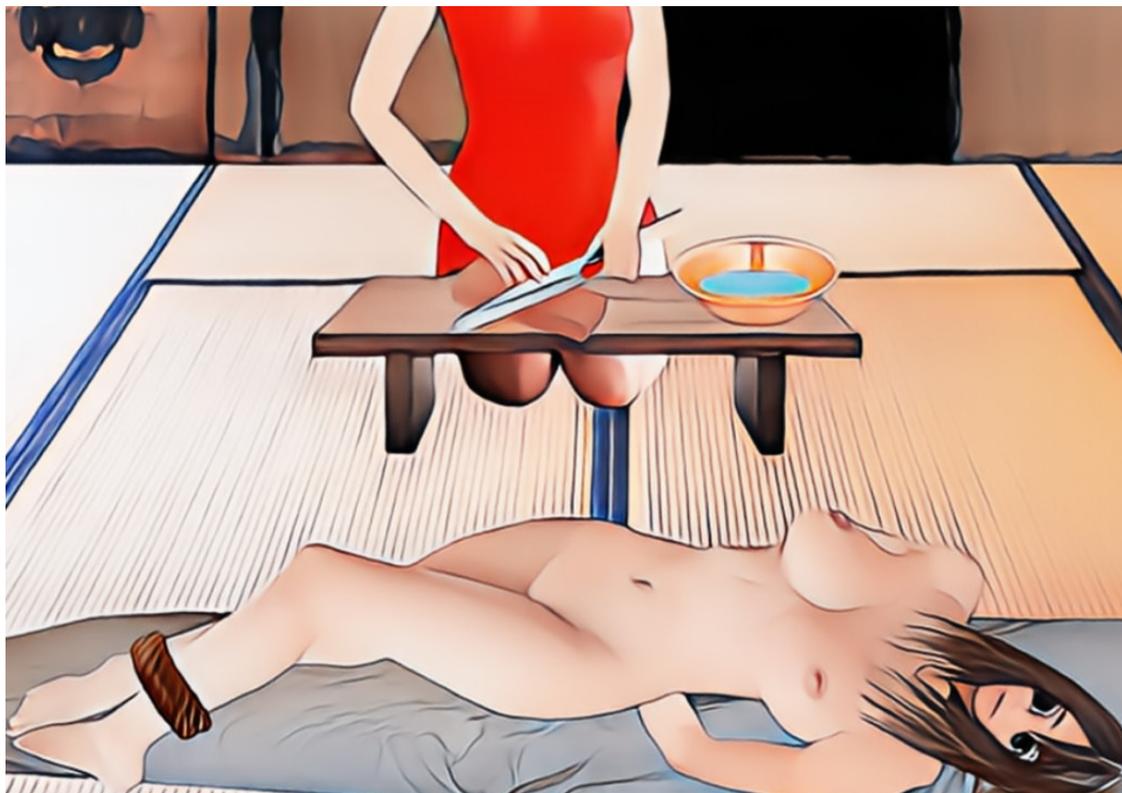
「本当に美味しそうな身体だね」

口裂け女は、結衣の白い太腿を押し開いた。淫らな視線が結衣の下半身に粘りついた。口裂け女の口から、細長い舌がゆっくりと出て来て、結衣の膣に侵入してきた。粘膜を舌尖で擦られる感触に眩暈を感じた。気が狂いそうになるほどの快感だった。結衣は思わず、鋭い喘ぎ声を上げていた。

膣の次はアヌスに細長い舌を挿入された。クリトリスを指先で刺激され、結衣は忘我の状態だった。

結衣は何度も逝かされ、半ば失神状態で布団の上に横たわっていた。

口裂け女は、枕元で結衣の裸身を見下ろしながら、刺身包丁を研いでいた。口元からは大量の唾液が零れ落ちていた。



突然、夢遊病者のように立ち上がり、隣室に消えた。

口裂け女は、広さ四畳半ほどの和室で畳の上に座り、タンスから木箱を取り出した。蓋を開け、中から年代物の白黒写真を取り出した。写真にはひとりの軍人が映っていた。写真に写る男を見詰めていた口裂け女が、次第に人間の顔へと変化していった。目鼻立ちが美しい美女が現れた。

「幸次郎……」

女は男の名を口にした。目元から一筋の涙が零れ落ちた。表情が再び変化した。元の口裂け女の顔に変化していく。女が動いた。畳の上に置いていた刺身包丁でいきなり自分の首を突いた。鮮血が溢れ出し、畳の上を流れていく。

口裂け女は、大量に出血しながら、畳の上を這って結衣がいる部屋に進んで行く。

結衣は意識が戻っていた。隣室から血塗れの口裂け女が、這って自分の方に近付いてくるのを見た。髪を振り乱し、悪鬼のような形相で近付いて来る口裂け女に激しい恐怖を感じた。泣き叫び、

許しを請うた。逃げたくても手足は紐で縛られ、腰が抜けどうにもならない。

口裂け女の血塗れの手が、結衣の裸身を押えつけた。結衣の首筋に噛み付き頸動脈を乱杭歯で噛み裂いた。嘔き出す鮮血を喉の奥で受け止めた。

泣き叫ぶ結衣の動きが、次第に緩慢になっていく、やがてピクリとも動かなくなった。それでも結衣の引き裂かれた首筋に口を付け、鮮血を吸い続けた。

口裂け女は、出血多量で絶命した結衣の足首を掴み、畳の上を引きずっていく。

古民家を出て、古井戸の近くにある大岩に死体を横たえ、斧で四肢と首を切断した。白い腹を刺身包丁で切り裂いた。手を裂け目に押し込み、血塗れの内臓を取り出し、生のまま齧り付いた。

第三章 靈能者

翌朝、角田は見知らぬ部屋のベッドで目覚めた。

隣には満里奈が可愛い寝息を立てていた。

角田が静かに起き上ろうとした。

「お早う」

角田の背中に満里奈が声を掛けた。

「済まない。こんなことになって」

「何謝っているのよ。あんなに気持ちが悪かったのは角田さんが初めてよ」

満里奈が角田の背中に抱き付いてきた。マッシュマロのような柔らかい乳房の感触に男根が一気に勃起した。

「御免。会社行かなきゃ」

「今日は土曜日よ。会社が嫌いだと言っていたくせに。ここは正直よ」

白魚のような手に男根を扱かれた。満里奈は、おどおどする角田の男根を口に含み、口腔性交を始めた。あまりの気持ち良さに射精寸前になった。角田は満里奈を抱き上げ、ベッドの上に四つん這いにさせ、深い尻の割れ目に顔を入れ、アヌスを存分に舐め回した。鋭い喘ぎ声を上げる満里奈の膣口に背後から突き入れた。

三十分後、二人はシャワーを浴びて、再びベッ

ドに横になった。互いに性器を手で弄んでいた。

「これ可愛いね。蝶々の形しているね」

角田は満里奈の腹部に小さな痣があることに気が付いた。

「生まれたときからあったそうよ。ママが言っていたわ。恥ずかしいから見ないで」

満里奈は小さな痣を手で隠した。

「そうだ。ニュース見なきゃ。テレビ点けてくれないか」

角田が思い出したように起き上った。昨夜の出来事が気になっていた。

「いいけど。見たらまたしてね……。お願い」

全裸姿の満里奈が二十七インチの液晶テレビのスイッチを入れた。

殺人事件のニュースが飛び込んで来た。昨夜の公園での惨劇が流されていた。

今朝七時。散歩途中の会社員が公園で若い男の変死体を発見したとのことだった。男は全裸で性器を鋭い刃物で切り取られていた。

角田は若い女も口裂け女に拉致されたことを知

っていたが、そのことは記事になっていなかった。

「嫌だ。この公園家の近くよ」

「ああ……」

角田は突然、布団をかぶり、ブルブルと震え始めた。

「どうしたの？」

「……見たんだよ」

「何を？」

角田は無言で満里奈を布団の中に引き込み、抱き付いた。

それから二人は互いを貪り合った。結局、口裂け女のことは話さなかった。信じてもらえるとは思えなかった。

土日の二日間、角田は満里奈のアパートを出ることは無かった。食事は近所の中華店や蕎麦屋の出前で済ませた。料金はすべて、角田が支払った。以前、会社の上司から苛めに合い、降格や昇給を一時的に止められていたが、それでも給料は人並みには得ていた。

月曜の朝、角田は満里奈に洗濯してもらったワイシャツを着て会社に向かった。満里奈は大学は午後からで、角田が家を出る時はベッドで安らかな寝息を立てていた。寝顔は天使のように愛くるしく感じられた。

満里奈のアパートから地下鉄駅までの間に問題の公園が位置していた。早朝で周囲は明るかったが、公園の近くを通りたくは無かった。

しかし、足は自然と公園の方に向かっていった。五分程度でその公園に着いた。どこにでもある普通の公園だった。ブランコや滑り台などの遊具が型通りのに置かれ、トイレや水飲み場も設けられていた。中央部は小さな林となっていたが、古井戸や古民家は存在しなかった。殺人事件から三日が経過しており、警察の姿は見られなかった。

あれは夢だったのだろうか。角田は自問自答した。

その時、不意に背後から肩を軽く叩かれた。ぎよつとして振り返った。

九十過ぎに見える皺だらけの老婆が、角田の顔

をじっと見詰めていた。

「お前。憑かかれているな？」

唐突な感じで言ってきた。

「あ、貴方は何ですか？急に失礼ではありませんか」

角田は腹が立っていた。

「ワシはさる教団の教祖様じゃ。霊験あらたかな霊能力者でもある。どうだ、驚いたであろう」

「私には関係ありません」

角田は一刻も早くその場を離れたかった。老婆が恐ろしい狂人に思えたのだ。大体自分のことを様呼ばわりし、霊験あらたか等と言うこと自体胡散臭かった。何をされるかわからなかった。

「お前を救ってやろう」

去り行く角田の背中に声を掛けてきた。

角田は、始業開始前三十分に会社に到着した。

自席に着いて、パソコンの電源を入れた。メールを起動すると何件か受信した。

その中の一件に目を止めた。上司から内示の連絡メールだった。内容を確認して気分が重くなっ

た。この春に中途採用で入社した三十そこそこの男子社員が係長に昇格していた。昨日まで主任である角田の部下だったのだが、今日から立場は逆転した。

「角田さん。お早うございます」

係長の内示を貰った和久井が角田を見下ろしていた。

「お早うございます」

何となく気まずい感じがした。言葉も敬語になっていた。自分の歳であれば息子といってもおかしくない年齢だった。

「先輩。どうしたんですか？あつ。内示のことですね？」

「御目出とうございます」

角田はぎこちなく頭を下げた。

「そんなに気を使わないで下さいよ。角田さんには、これからお世話になるんですから」

角田はその日定時で会社を出た。和久井から飲み会に誘われたが、体調不良ということで丁重に

断った。

その日も自宅に帰る気にはなれなかった。自然と元妻の家に向かっていた。

妻の沙耶と別れてから三年の月日が流れていた。親子ほども歳の差がある夫婦だった。馴れ初めは、沙耶が角田の会社に新入社員として入社し、角田が教育係を担当したことだった。沙耶はモデルのような美しい肢体と美貌の持ち主だった。

何故、沙耶が自分に惹かれたのかは、今でも謎だった。

結婚と同時に沙耶は退社していた。

彼女の家は、閑静な高級住宅街にあった。沙耶は角田と別れてからすぐに七十代の資産家と再婚していた。沙耶は三十代後半の年齢であるが、二十代にしか見えず、容姿も結婚当時と変わらず美しかった。

建坪数百坪はある白亜の豪邸の前には、広大な前庭が広がっていた。すぐ家の前の道路でブラブラしていると、数十メートル離れた場所に車のライトが見えた。電信柱の影に身を隠した。黒塗りのベンツが家の前で停車し、道路に面した車庫の

シャッターが自動で開き始めた。車内には沙耶と夫と思われる老人が乗っていた。

車庫から出て来た二人は、仲睦まじく手を繋いで家の門をくぐって行った。鉄格子の門扉が自動で閉じた。

角田は電柱の陰から出て、二人の後姿を目で追った。沙耶は相変わらず美しかった。だが、彼女の笑顔は自分のものでは無かった。二時間余り、家の様子を窺っていた。人通りはほとんどなく、怪しまれることも無かった。

家の照明がすべて消えた。少しして二階の一室の照明が点された。

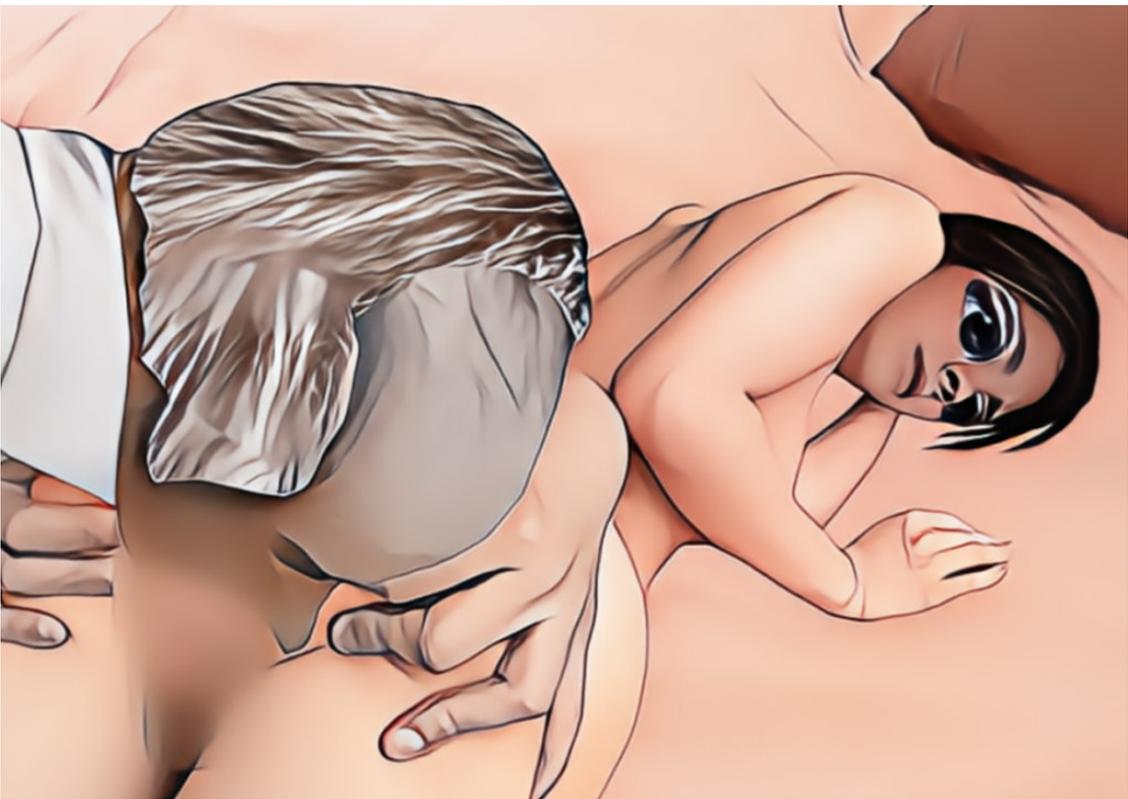
角田は、監視カメラが無いことを確認してから門扉を乗り越えた。不法侵入で逮捕される危険性はあったが、自分を止めることはできなかった。数年前に別れたとはいえ、二十年近くも連れ添った女であった。まだ、未練が残っていた。目的は二階にあると思われる寝室だ。前庭の片隅に梯子を見つけた。それをバルコニーまで立て掛けてゆっくりと登っていく。

バルコニーの上に立ち、息を殺してカーテンの隙間から室内の様子を窺った。全裸の沙耶がうつ伏せでベッドに横たわる様子が見えた。三十代の後半に達しているが、肉のたるみはほとんどなく、白い肌の色艶が艶めかしかった。

少しして夫と思われる頭部が剥げ、痩せた体躯の男が部屋に入って来た。

沙耶の白いすべすべの尻を両手で割り、顔を押し込む様子が見えた。男は延々と沙耶のアヌスを舐っていた。沙耶はシーツを掴み、喘ぎ声を上げ続けていた。

角田はジツパーを外し、男根を取り出し自慰を始めた。男が沙耶の尻から顔を放し、ベッドに腰



かけ赤ワインを飲み始めた。沙耶が起き上り、男のパンツを降ろし、半勃起状態の男根を数回、指先で扱いてから、パクリという感じで呑み込んだ。男は沙耶の髪を撫でながら、ワインを飲み続けた。男が動いた。沙耶をベッドに仰向けの姿勢で横たえ、太腿を持ち上げて、貪るように膣口を舐り始めた。暫く舐った後で、膣口に一気に挿入した。沙耶は気持ち良さそうに男の動きに合わせて、腰を淫らに振った。

角田の手の動きも激しくなった。二人が果てる時、ほぼ同時にバルコニーの床に向けて射精した。

角田は暗い夜道を肩を落とし歩いていた。行くべきでは無かった。後悔の念に押し潰されそうになっていた。醜い老人に抱かれ、喘ぎ逝く沙耶の白い裸身が脳裏に焼き付いていた。

沙耶が他の男に抱かれ逝く様を見せ付けられ、それを見ながら自慰をした自分が情けなくてしようが無かった。

それに加えて自分の子供と変わらない年齢の後輩が、上司に昇任した会社の人事も追い打ちをかけていた。生きる気力は失せていた。

いつの間にか、例の公園に来ていた。

「来たのかい？」

背後から肩を軽く叩かれた。振り返ると大きな白いマスクをしたあの女が立っていた。

次の瞬間、口裂け女の肩に担がれていた。不思議と恐怖心は感じなかった。この女に殺され生涯を終えるつもりだった。女は角田を担いで公園の中心部へとゆっくり歩いていた。急に深い霧が立ち込め、ふたりの周囲を包んだ。一瞬で霧は晴れたが、ふたりの姿は無かった。

第四章 後悔 へと続く

